



あいあい
×
武蔵美
プロジェクト

第 48 回 言語文化教育研究学会 月例会

社会とつながる日本語教育を「見える化」するために
— あいあい × ムサビプロジェクトのドキュメンタリー映像から —

12 月 17 日 (土)

14:00~16:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 22 号館 615 教室

参加費：無料 予約：不要（会場に直接お越しください）

お問い合わせ： monthly@alce.jp（月例会委員会事務局）

話題提供者：三代純平さん（武蔵野美術大学）

首藤なずなさん（武蔵野美術大学芸術文化学科学生）

福村真紀子さん（「多文化ひろば あいあい」主宰）

社会とつながる日本語教育を「見える化」するために
—あいあい × ムサビプロジェクトのドキュメンタリー映像から—

社会とつながる日本語教育が注目を集めています。「社会とつながる」ということばには、社会の中でことばを学ぶということだけではなく、ことばを学ぶ実践を通じて、よりよい社会をめざしていこうということが含意されています。しかし、このような実践はいかに評価されるべきなのでしょう。参加者は何を学んでいるのでしょうか。また、そもそも「学び」とは何なのでしょう。まだまだ議論しなければならないことが山積しています。この議論を可能にするための一つの方法として、話題提供者の三代は、実践の映像化を試みました(*1)。社会とつながる日本語教育実践の学びは、個人の能力にも還元できず、単純に数字で測定することもできません。しかし、実践のプロセスを映像として残し、共有するならば、映像から実践の意味をそれぞれが感じとり、それを議論することはできます。現在さまざまな場所で実践されている社会とつながる日本語教育を「見える化」し、批判的に共有していくことで、社会とつながる日本語教育をより発展させることができるのではないのでしょうか。

そこで、本発表では、社会とつながる日本語教育の「見える化」の試作として作られた「あいあい × ムサビプロジェクト」(*2)のドキュメンタリー映像を視聴した後、以下の2点について参加者の皆様と議論したいと考えています。

- ① 映像から見える実践の意義と課題とは何か
- ② 実践を「見える化」するためには、何をどう見せればよいのか

*1 映像の制作は、武蔵野美術大学芸術文化学科の首藤が担当しました。

*2 「あいあい × ムサビプロジェクト」とは、武蔵野美術大学上級日本語の履修生が、多文化交流と個々人の自己実現を目的とした、市民の活動「多文化ひろばあいあい」と共に、日野市子ども家庭センターの協力のもと、日野市の親子の国際交流を目的としたイベントを開催するというプロジェクトです。

話題提供者：三代純平さん（武蔵野美術大学）

首藤なずなさん（武蔵野美術大学芸術文化学科学生）

福村真紀子さん（「多文化ひろば あいあい」主宰）